

2024年4月28日

主題「百人隊長の信仰」

ルカの福音書 7:1-10

序

昨日から連休が始まって、お客さんを迎えたり、出かけたり、みなさんも色々と予定があるかもしれません。私は去年びっくりしたんですけれども、この時期の軽井沢は本当に混むんですね。そんな時でももしかしたら、私たちの心も体も落ち着かずに、忙しく動き続けているのかもしれません。ですけれども、いま私たちは神のことばの前に立ち止まり、神のことばに聴き、イエスの思いを受け取っていきたくて願います。

さて、先週で二ヶ月間あまり共に耳を傾けてきた「平地の説教」が終わりました。今日の箇所1節にはこのようにあります。

イエスは、耳を傾けている人々にこれらのことばをすべて話し終えると、カペナウムに入られた。

イエスは耳を傾け、ご自分のことばを聞いた人たちへ話しを終えられると、カペナウムに入られました。そして、宣教のわざをカペナウムでも始められた。

1. 百人隊長

そこに今日の話しの中心となる百人隊長がいました。この百人隊長という役職は、その名のとおり、百人の兵士の指揮官、リーダーをする役職です。人をまとめ、導き、育てる仕事。そんな彼は今日のみことばにある、ユダヤ人の長老たちのことばや百人隊長の行動、これらを見ると、彼は神の民と呼ばれるユダヤ人ではなく、おそらくローマからカペナウムに派遣された異邦人であったと考えられるんです。その背景を知った上で今日開いたみことばを聞いていきたくて願います。2-3節をご覧ください。

*時に、ある百人隊長に重んじられていた一人のしもべが、病気で死にかけていた。
百人隊長はイエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、自分のしもべを助けに来てくださいとお願いした。*

この百人隊長のところに、大切にされている一人のしもべ、男性の奴隷がいた。しかし、このしもべは病気で死にかけていました。このしもべの病気についてルカは特に何も記していませんけれども、マタイの福音書ではこのしもべの病気が中風、身体の麻痺であり、ひど

く苦しんでいることが書かれています。しもべが病気におかされて死にそうなこの状況。その中で、百人隊長はイエスの話し、イエスがこれまでなさってきた宣教のわざを聞いた。イエスの語られたことば、病気をいやされたこと、悪霊を追い出されたこと、これらをこの百人隊長は聞いたわけです。そして、彼はユダヤ人の長老たちを送って自分のしもべを助けてほしい、とお願いをしたわけです。4-5 節。

イエスのもとに来たその人たちは、熱心にお願ひして言った。「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。私たちの国民を愛し、私たちのために自ら会堂を建ててくれました。」

この長老たちは熱心にイエスにお願ひをした。百人隊長のしもべをいやしに来て欲しいと。そして、その理由をこう語るわけです。

「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。私たちの国民を愛し、私たちのために自ら会堂を建ててくれました。」

長老たちは言いました。この百人隊長は、イエスにいやしてもらうだけの資格がある人だ、と。この資格のある、というのは「価値のある」とか「ふさわしい」とかそう言った意味をもつことばです。なぜ彼らはそのように思うのか。それは、この百人隊長が「私たちの国民を愛し」ている人であり、具体的な事柄として「私たちのために自ら会堂を建ててくれた」人だからだ、というわけです。この百人隊長は、遣わされた地であるカペナウムのユダヤ人たちを大切にしていた。彼らの宗教を、信仰を理解し、自らその会堂を建ててくれた、ということからも大切にしていたことが分かります。ユダヤ人たちは、この百人隊長の行いや言葉から、自分たちに対する愛を感じていたんです。異邦人である彼が、ユダヤの長老たちにこのように言われることは、驚くべきことであるわけです。また自分の家族が病気なのではなく、しもべが病気であることにここまで真剣にいやしを求める姿からも、彼がどんな人であって、人々から信頼されてきたのかが見えてくるかと思えます。

そしてここで思うことは、この百人隊長は、なぜ会堂を自ら建てたり、しもべのいやしを求めたり、これほどユダヤ人たちから信頼されていたのだろうか、ということです。それは彼が人格者であったということだけではなくて、彼が異邦人でありながらも、ユダヤ人の信じる神が唯一の神だと信じていたからだと思うわけです。だからこそ、神と人とを愛して、仕える中で信頼を得てきたのだらうと考えることができるわけです。

2. 百人隊長の信仰

この長老たちから話しを聞いたイエスはどうされたのか。6節前半をご覧ください。

そこで、イエスは彼らと一緒に行かれた。

続けて、6節後半から7節。

ところが、百人隊長の家からあまり遠くないところまで来たとき、百人隊長は友人たちを使いに出して、イエスにこう伝えた。「主よ、わざわざ、ご足労くださるには及びません。あなた様を、私のような者の家の屋根の下にお入れする資格はありませんので。7 ですから、私自身があなた様のもとに伺うのも、ふさわしいとは思いませんでした。ただ、おことばを下さい。そうして私のしもべを癒やしてください。

百人隊長は、イエスが家の近くまで来たときに、自分が迎えに行くのではなくて、わざわざ友人たちを使いに出しました。そして、「主よ、わざわざ、ご足労くださるには及びません。あなた様を、私のような者の家の屋根の下にお入れする資格はありませんので」というんです。「助けに来てください」と願って、せっかくここまで来てもらったのに、私にはイエスを家にお入れする資格などない、と言うのです。なぜ、こんなことを言うのか。それは、ユダヤ人が異邦人を訪問することは許されていなかったからです。使徒の働き 10 章 28 節はこのように書かれています。

ご存じのとおり、ユダヤ人には、外国人と交わったり、外国人を訪問したりすることは許されていません。

これが当時のユダヤ人たちの異邦人に対する理解だったんです。異邦人と交わり、訪問すること、たとえば食事をするのは偶像礼拝のために捧げられた肉が出される可能性がある。だからこそ、このように禁じられていたわけです。百人隊長は自らが異邦人であることをよくわかっていた。だからこそ、この律法を理解した上で、「資格がない」と考えたのです。ですから、ユダヤ人の長老たちが「資格のある人」だ、と言って評価していたのとは正反対に、自分はイエスの前に出ていく「資格はない」と百人隊長は考えた。しかし、そんな彼が願ったのは、イエスの「ことば」。それさえあれば、私のしもべはいやされる、と語った。そしてその理由を 8 節で説明します。8 節。

と申しますのは、私も権威の下に置かれている者だからです。私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。」

百人隊長は、権威の下に置かれている存在であり、権威を持っている存在でもある。だからこそ、兵士たちや別の者、しもべに「行け」と言えば彼らは「行く」し、「来い」と言えば「来る」。そして「これをしろ」と言えばそれがなる。これと同じように神の権威の下にあるあなたが「ことば」をくれれば、それは必ず「なる」からだ、と説明したわけです。これを聞いたイエスは9節。

イエスはこれを聞いて驚き、振り向いて、ついて来ていた群衆に言われた。「あなたがたに言いますが、わたしはイスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません。」

イエスは驚かれた。これまで神のことばを聞いてきた神の民であるイスラエルの中でもこれほどの信仰はなかった。それほど、異邦人である百人隊長のみことばへの信頼は突き抜けていたんです。そして10節で、

使いに送られた人たちが家に戻ると、そのしもべは良くなっていた。

結論 みことばへの確信

このようにイエスのいやしが行われた。ルカはここでいやしの詳細については何も触れていません。マタイの福音書では、「行きなさい。あなたの信じたとおりになるように」と言われています。すると、ちょうどそのときにしもべがいやされたわけです。なぜ、ルカはこのいやしの詳細を描かなかったのか。それは、ルカが百人隊長の「信仰」に注目をしていたからです。イエスが「驚かれた」ことを記録しているのは、聖書で2回だけです。今日のこの箇所とマルコ 6:6にあるナザレにおける不信仰に対する驚きです。イエスが驚くほどの信仰にルカは目を留め、ここを中心にしてこの出来事を書き記していったわけです。ルカが記したこの百人隊長の信仰。ここにあるのは、イエスのことばへの信頼です。しかし、これをこのたった一言「イエスのことばへの信頼」と表すことは簡単なことですが、今日の箇所を見れば、それがいかに難しいことであるかがわかるはずです。この百人隊長は、自分が異邦人であることをよく知っていました。自ら会堂を建て、ユダヤ人たちに愛を感じてもらえるほどに、「神の民」のことを知っていた。また神の律法を重んじ、異邦人との交わりを避けてもいた。

だからこそ、神の権威をもつイエスのもとの行くことも、家に入ってもらうことも「資格がない」「ふさわしくない」と思っていた。しかし、あなたの、イエスのことばは違う。あなたのことばが私と神をつなげる架け橋であると、それさえあれば神の権威によって私のしもべは必ずいやされる、と信じたんです。これがイエスの驚かれた信仰です。

そして、この百人隊長が持った「距離感」、つまり自分には「資格がない」「ふさわしくない」と思うこと。これって百人隊長と同じ異邦人である私たちにも言えることです。私たちは異邦人です。そして彼と同じように、イエスと直接出会うことができないのが、現代を生きる私たちです。しかし、この隔たりを埋める架け橋こそ、みことばなんです。私たちは「神のことば」を通して、神を知る。イエスを知る。聖霊を知る。神は私たちにみことばを与えてくださった。いのちのことばを与えてくださった。時代を超え、異邦人という壁をこえ、この神のことばは私たちにまことの救いを与える唯一の神と私の架け橋です。この神のことばが「実現」することを信じる時、私たちはどんなに「距離感」を感じ、「ふさわしくない」と「自分には資格がない」と思っても、神のことばは「救いを成し遂げる」。ここに私たちはこの百人隊長のように、謙遜になりつつも、大胆に信頼したい。

なぜなら私たちの救い主は、6 節にあるように、願い求める者のところに、来てくださるお方だからです。私たちのつたない話を聞き、「そうか、そうか」と言って、じゃあ一緒に行こう、と私たちの下に来てくださるお方です。私たちは罪汚れていて、ふさわしさのカケラもない、イエスにわざわざ来ていただける資格なんてこれっぽっちもない。でも、どうか私の下に来てください。あなたのおことばを私にください、と願い求めています。そのことばは、キリストと私をつなげ、まことのいのちへ導く光であり、すべての隔たりを超えて、私たちを生かす福音です。このキリストのおことばに私たちは信頼し、共に生きていきましょう。最後に、1ペテロ 1:8-9 節を共に開いて終わります。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。あなたがたが、信仰の結果であるたましいの救いを得ているからです。